

改定 長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R) よくある質問 ワンポイントアドバイス

I. 設問1～9について

(設問 1) 年齢

(Q) 年齢を聞く設問で、2年までの誤差を正解としているのはなぜか？

(A) 数え年で答える人もおり、誕生日を迎えているかどうかで誤差が生まれる可能性があるため。
ちなみに生年月日を言うことができても、年齢が言えなければ0点となる。

(設問 2) 今日の年月日、曜日の質問(時間の見当識)

(Q) 何年の何月、何日、何曜日と順番に聞いていかなければならないのか？

(A) この設問は、時間の見当識に関する質問なので、どの順番で聞いてもよい。
たとえば、「今日は何曜日ですか？」「今日は何月何日でしたか？」「今日は何年になりましたか？」
というように、逆から聞いた方がうまくいく場合も多いです。

(設問 3) 今いる場所(場所の見当識)

(Q) 病院で検査するような場合、その病院名が言えなければ正解としないのか？

(A) 病院名を答える必要はなく、自分が今いる場所が本質的に理解できていれば、正解とする。

(Q) 自発的に答えられなかった場合、ヒントの与え方はマニュアルどおり「家ですか？」「病院ですか？」
「施設ですか？」の3つを使わなければならないのですか？

(A) この3つのヒントは、1つの例であり、「家ですか？」「デイサービスですか？」「公民館ですか？」のように
変えてもかまわない。

(設問 4) 3つの言葉(3つの言葉の記銘)

(Q) 3つの事を覚えやすい他の言葉に置き換えてのよいのか？

(A) 他の言葉に置き換えてはいけません。
この3つの言葉は、検査を作成するときに「植物の名前」「動物の名前」「乗り物の名前」から連想する言葉の
上位2つから選んで作成している。
また3つの言葉同士に関係性のないものを使用しているため、この3つの言葉を使うことにしてある。

(Q) 3つの言葉のうち、2つしか覚えられないときには、どうすればよいのか？

(A) 3つの言葉のうち、2つしか覚えられないときには、2点と採点する。
この3つの言葉は、設問7でもう一度尋ねる設問であるため、採点した後もう一度尋ねる設問であるため、
採点した後もう一度3つの言葉を覚えてもらう。
これを、3回まで繰り返し、3つ覚えられたときに設問7で3つの言葉をもう一度思い出してもらう。
もし、3回繰り返しても2つしか覚えられないときには、設問7で、「2つの言葉がありましたね」というように聞く。

(設問 5) 引き算(計算問題)

(Q) 100引く7の答えを、たとえば92で答えたとき、「92引く7はいくつですか？」と聞いてもよいのですか？

(A) 最初の引き算に失敗したら、そこで打ち切る。
ちなみに、「100引く7はいくつですか？」と設問し、「93」という正答が得られた場合、「それからまた7引くと？」
と、設問するものであり、「93引く7は？」とは言ってはならない。
100から7引くと93になるが、その93という数字を覚えてもらってさらに7を引くという作業記憶の
課題でもあるため、93という数字を検査者は言うてはならない。

(設問 6) 数字を逆さからいう問題(数字の逆唱)

(Q) 数字を提示するときには、どのくらいの早さで言えばよいのか？

(A) 数字はゆっくりと、1秒間隔くらいのスピードで提示する。
できれば、「これからいう数字を反対から言ってみてください。たとえば、1 2 3 を反対から言う」というように練習問題を入れるとよい。
この設問は、単なる数の操作の問いではなく、「2 8 6」という数を頭で覚えておきながらそれを逆にして回答するという作業記憶の課題でもある。

(Q) 3桁の逆唱に失敗しても4桁の逆唱を行うのか？

(A) 3桁で失敗したら、そこで打ち切る。

(設問 7) 3つの言葉の想起(3つの言葉の遅延再生)

(Q) 3つのうち1つしか答えられなかったときのヒントの与え方はどうするのか？

また、そのタイミングは、どう考えればよいのか？

(A) ヒントは1つずつ、与えるようにする。
たとえば、「桜」という答えがでた場合には、「動物もありましたね」というヒントを与え、それに対する回答を待ってみる。
そして、正答であっても誤答であっても、または「分からない」と答えた場合であっても、何らかの回答が返ってきたら、「乗り物もありましたね」というようにヒントを与える。
ヒントを与えるときに「動物と乗り物がありましたね」と一度に言うてはならない。
自発的に答えるのを待つつもりで設問すべきであり、「桜」という答えしかできないときにすぐにヒントを与えようとせず、「他にもありましたね」というように、少し時間を与えるようにする。

(設問 8) 5つの物の名前想起(物品記銘)

(Q) 提示する物は、どんな物でもよいのか？

(A) 5つの物品は何でもよいが、携帯電話のように本人にとってなじみのない物は避けるべきである。
5つの物品は、相互に無関係の物にすることが重要であり、たとえば「鉛筆」「消しゴム」のように関連性のある物は、さげなければならない。

(Q) 5つの物品の提示の仕方ではどんな点に気をつけるべきなのか？

(A) 物品は1つずつ名前を言いながら目の前に置くようにする。
実際には「これは時計ですね」といって目の前に置き、「これは鍵ですね」というように1つずつ確認しながら置いていく。
5つ並べ終わったときに1つずつ確認し、「これは？」と聞いて「時計」と反応したら、次に「これは？」と聞いて「鍵」と答えてもらうようにする。
そして、その5つを見せたまま、「これからこれを隠しますから、何があったか言ってください。
順番はいつでもいいですから、思い出したのから言ってみてください」と教示する。
また、最後の1つが出てこないような場合であっても、すぐに終わりにするのではなく、なるべく本人に思い出してもらうように、少し待ってみるくらいの余裕を持って検査を行う。

(設問 9) 野菜の名前(言語の流ちょう性)

(Q) この設問は、野菜の名前をどのくらい知っているかという知識の設問なのか？

(A) この設問は、知識を調べる設問ではなく、言葉がどのくらいスラスラででくるかという言語の流ちょう性の設問である。

また、同じ野菜の名前が出てきても「それは先ほど言いましたね」と遮ることはせず、重複してもそのまま記録用紙に記載し、重複した物をあとで減点していく。

(Q) なぜ、5つめまで採点せず、6つめから1点と採点するのか？

(A) 検査を作成したときに、認知症高齢者の平均出現個数が約5個、健常高齢者の平均出現個数が約10個であったためである。

(Q) なぜ、野菜の名前なのか？女性の方が有利な設問ではないか？

(A) 検査を作成するとき、すべての設問に地域差や性差がないものということで作成してある。野菜の名前についても、地域差、性差は認められていない。

質問は以上です。採点・判定をしてみましょう。

20～30点	異常なし
16～19点	認知症の疑いあり
11～15点	中程度の認知症
5～10点	やや高度の認知症
0～4点	高度の認知症

II. 検査全般について

(設問の順番について)

(Q) この検査は、1から順番に行っていかなければならないのか？

(A) 順番はいつでもよく、日常会話に織り交ぜながら聞きやすいものから聞いていってもよい。ただし、設問4～7の4つの問いは順番どおり、続けて行わなければならない。

(検査の導入にあたっての注意)

(Q) 検査を始めるときに、どのように導入していけがいいのか？

(A) いきなり「もの忘れの検査をする」というのではなく、「最近もの忘れが気になったりしませんか？」というような切り出し方をする。

能力を試されると言うことは、だれでも苦手なことなので、テストに導入するときには、いきなり始めるのではなく、しばらく世間話をして本人にリラックスしてもらってから始める。

(検査を終了した後の注意点)

(Q) 検査が終わった後に注意すべき点は何か？

(A) 検査終了後のアフターケアは非常に重要であり。

「疲れましたか？」という言葉をかけたり、最後の設問の「野菜」をテーマにした話をしたりするなど、いやな気分のまま検査を終わらせないようにする注意が必要である。